



薬事日報連載再開タイトル：劇場型イノベーションの興しかた

「ハードルを越える最初の一步もジブン。最後に踏み切るのもジブン」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2025.6.10

息をするように、言い訳をしてきた。我ながら見苦しい言い訳ばかりで、呆れる。失敗のたいていがヒトのせい、モノのせい。「ヒサヨシ君が鼻血を出して驚いたから、宿題忘れた。」「滑り台を滑ったせいで大便が漏れた。」幼馴染みに大変申し訳なかった。だがよもや公共の遊具を「公衆便所化」した罪は重い。ベルトコンベアー式に被害者を増産してしまった。

見苦しい言い訳の末路には、制裁パッケージが待っていた。僕が成人するまでの教育担当だった祖母により、厳粛かつ滞りなく執行された。特に、ヒトやモノのせいにしたときの鉄拳制裁、ときどき百裂拳に恐れ慄いた。それでも言い逃れをやめられなかった。

「ジブン、不器用ですから。」コレだと思った。凜とした竹まいの高倉健さん(俳優、故人)が言うと、凄くキマッていた。言い訳のオールマイティカードを見つけた気がした。

しかし、凜としていない僕が言い放っても効果はなかった。多分、あの魔法のコトバの使いどころは、色恋の場面一択なのだろう。僕にそれを使う場面は、まだ訪れていない。

見苦しい他責から、不器用さを開き直す作戦に切り替えても、事態は好転しなかった。

むしろそれが事実過ぎて、周囲をしんとさせてきた。宇部高専に入学し、研究者を目指した頃から、不器用さが顕在化したからだ。

僕の不器用さは、一線を超えていた。大腸菌を取り扱う研究室では、それ以外のよからぬカビばかりを生やし、チームの研究活動を壊滅させかけた。結果として、僕だけが菌体培養のローテーションから外れることになる。教授の英断に感謝するほかない。

別の場面では、高額な分析機器類を「指先一つでダウン」させてきた。頼まれもしないのにシャキシャキと研究機材を破壊する、勤勉なテロリズム。さぞかし研究室の「ユー(達)はショック」だったと思う。むろん故意ではないが、刺すような視線が敏感肌に沁みた。

チームにはぐれてただ一人、国の研究費を無駄使いする僕の行動は、誰がどう見たって「世紀末・足手まとい」伝説だった。卒業が危ぶまれたあの頃、北斗七星の隣に輝く星が見えたような気がした。あれは死兆星。死を司る星だ。

恩師の山岡先生(宇部高専・名誉教授)からは、「お前、就職先では分析機器に触れるなよ！」と訓戒を受けた。「ダメ。ゼツタイ。」と、麻薬撲滅キャンペーンのように、きっぱりとした口調だった。誓約は、すぐに反故にしてしまった。だって研究員だもの。掟破りの事實は、

タケダにおいて分析グループを統括するまで黙秘した。山岡先生、クロマトがしたいです。

何を言っているのだろうか。少年ジャンプが僕に与えた影響は大きい。そろそろ終盤の今回は、「自己実現」のお作法について述べる。そして連載のスキルセット編を締めくくる。

プレゼンテーションの回では「テクニカルスキル」について触れた。続く戦略の回では「コンセプチュアルスキル」を伝えた。今回は「ヒューマンスキル」の見解を示す。

ヒューマンスキルについて講釈を垂れると、あたかも僕が人格者だと申告しているようで、猛烈に恥ずかしい。むしろその対極にある。敢えて自己認識を言語化するならば、「ケチでスケベで、ならず者。ついでに中二病」といったところだ。おそらくは、そこらへんのお父さんよりも、タチが悪い。

なので僕が正面を切ってヒューマンスキルを語る資格はない。その代わりに、他者を巻き込むために欠かせない「ステキセット」についてなら、何とか伝えることができそうだ。自分自身に課した「終わらない宿題」だからだ。何度もブレそうになりながら、取り組みを続けている。これをサボると霊体のバアちゃんから抜き打ちで、キツめのお仕置きを受けそうな気がしてならない。

以下に示すステキセット、つまり4つの取り組みを最初から決め打ちして行動したわけではない。随分と痛い目に遭いながら、今の自分にじっくりくる指針が残った。

◆ 自己実現のお作法として自身に課した「ステキセット」	
① Lead the Self	 自分自身が、夢中になってのめり込むことを見つける
② Lead the People	 自分の意図した通りに相手が進んで動いてくれるよう、仕掛け続ける
③ Lead the Society	 自分の鳴らす太鼓の音が、いつか遠くの誰かに響くことを信じる
④ Grandmother's lesson	 起きたことに見苦しい言い訳をしないで、自分の信念と活動の理由を伝え続ける

表1：自己実現のお作法として自身に課した「ステキセット」

これらの「宿題」は、自己実現に関する伊藤羊一さんの著書、「FREE, FLAT, FUN これからの僕たちに必要なマインド」から影響を受けた。ビジネスパーソンが避けて通れない、自己実現の手順がやさしい文体でまとめられている。この本のおかげで、経営者として他者を巻き込む「カタ」を整理させてもらえた。寄り道だらけ・キズだらけの僕の試みを振り返ってみると、伊藤さんが本書で喝破した段階別の取り組みと驚くほど一致する。人を通じて結果を出す職業に就きたい方、就いている方には是非おすすめしたい。

◆「FREE, FLAT, FUN これからの僕たちに必要なマインド」 p.234-235より

✓ FREE	常識から解放され、一人の人間として自由に生きる それは、「自分を導く」生き方
✓ FLAT	一人ひとりが、異なる意思を持つリスペクトされるべき存在である それは、「他者を導く」生き方
✓ FUN	一人ひとりが意思を決めて、生きられれば、楽しく幸せな社会になる それは、「社会を導く」生き方

表2：「FREE, FLAT, FUN これからの僕たちに必要なマインド」 p.234-235より

先天的に経営者の資質を持ち合わせている人は、おそらくいない。「ケチでスケベで、以下略」の僕なんて、なおさらだろう。強い意志を持って「ステキセット」を演じることに尽きる。事業として「成すか、成さないか」の前に、未来を変えたい側がその道化役を率先して「演じるか、演じないか」を決めるところから、勝負が始まっている。

「この世はすべて、ひとつの舞台。男も女も、人はみな役者に過ぎない。」
シェイクスピアの言葉に出逢えたことは、僕にとって幸運だった。

憧れの研究者、ルー・ゼンさんを追いかけて「劇場型イノベーション」を目指した。

「百万回の擦りキズ」を作りながら、人を巻き込んでいくスキルを身に着けていった。

最初の一步は、いつ頃だったか。クロマトグラフィー業界のタイガーマスクを目指した頃だと思っていた。だが本当の一步を踏み出したのは、見苦しい言い訳をするたびにバアちゃんから折檻された頃だったような気がする。滑り台の件のパンチは効いた。

深刻な不器用さを自覚しながら、素の自分とは別のペルソナ（外向きの人格）を演じる訓練を積んだ。幼児がお箸の持ちかたを覚えていくように、じっくりと時間をかけて。

幼馴染みのヒサヨシ君とは、お互いが4歳の頃からの付き合いだ。園児だった僕らは、揃ってこっそり近所の肥溜めに石を投げ込んだ。飛沫が美しく、とても臭かった。

ある日、僕らの「禁じられた遊び」がバアちゃんに見つかった。「そこに沈めてやる」と、猛然と追い回された。僕らは生まれて初めて、死を恐怖し、死を覚悟した。

現行犯逮捕にも関わらず「俺じゃないるれ」と言った途端に、百烈拳が炸裂した。

ヒサヨシ君には座右の銘があった。「俺、サムライじゃけえ。」幼い頃から、何の脈絡もなく坊主頭に半ズボン姿で、刀を抜くポーズをキメていた。その申告に意味はない。なので、こちらはいつも返答に困る。以来僕は、「聞こえながらスルー」を決め込んだ。

「サムライじゃけえ」の論法は、高倉健さんの「ジブン、」とよく似ている。脈絡のない自己開示をしておいて、相手方にリアクションを委ねるといったものだ。

健さんのように「存在そのものが芸術」ならそれで良い。一方でリーダーは、信念を持ってその先を伝えなければ物語が始まらない。自分にできることを公言したならば、他者がついて行くに足る文脈に仕立てるのが、成果に導く人のウデの見せどころになる。

「ハードルを越える最初の一步もジブン、最後に地面を踏み切るのもジブン」だ。

劇場型イノベーションの興しかた

「ハードルを越える最初の一步もジブン。最後に踏み切るのもジブン」

感銘を受けた本

伊藤 羊一さん
「FREE, FLAT, FUN これからの僕たちに必要なマインド」

竹馬の友

ヒサヨシ君（自称サムライ、塗装事業主）

実家のCEO

三輪バアちゃん（泣き上戸のお仕置き主義者）

◆人を通じて結果を出すということ

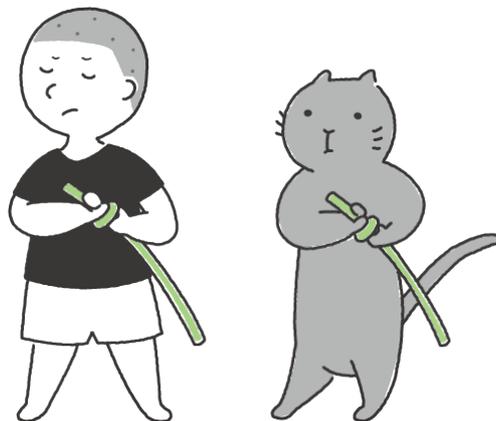
しょうもない言い訳や他責をする時点で、人が手を差し伸べてくれるはずもなかった。深刻な不器用さを自覚しながら、素の自分とは別のペルソナを演じる訓練を積んできた。遅か遠くまで太鼓の音を響かせたくて、信念と活動の理由を伝え続けることを選んだ



ヒサヨシ君は、立派に塗装屋の社長になった。もし彼がまだサムライを名乗っていて、僕の記憶のままに過ごしているのなら、その文脈はきっこうなる。

「俺、サムライじゃけえ。肥溜めを見つけ次第に投石するから、ついて来い。」

まさかね。今度、彼と久しぶりに飲みに行こう。お互い祖父になってしまった。



【了】